

## 平成 17 年度農学部卒業時・農学研究科修了時アンケートの

### 評価分析結果

平成 18 年 9 月 3 日

自己点検評価委員会

委員長 柵木利昭

応用生物科学部自己点検評価委員会では、年度計画・目標「これまでの授業評価を見直し、一層の授業改善に努める」ことの一環として、表記の卒業時・修了時アンケートの評価を平成 16 年度に引き続き実施しました。評価結果と分析結果を報告いたします。

今後、これらの評価をもとに、教員の授業内容の改善につなげ、教育カリキュラムを充実していく所存です。分析結果をお読みいただき、ご意見・ご要望がありましたら、学部までお寄せいただければ幸いです。

#### 平成 17 年度農学部卒業時アンケートの分析結果

##### 1. 回収率について

学部全体で約 91% (209 人中 190 人) と極めて高い回収率であった。その内訳は生物資源生産学科 (57 人中 51 人、89.5%)、生物生産システム学科 (61 人中 52 人、85.2%)、生物資源利用学科 (60 人中 59 人、98.3%)、獣医学科 (31 人中 28 人、90.3%) であり、学位記伝達時に調査し回収したため、このような高い回収率となったと考えられる。同様の平成 16 年度の調査 (203 人中 174 人、85.7%) と比べてもやや高いものである。

##### 2. 評価項目について

評価の対象とした 6 項目 (49 小項目) は 16 年度と全く同じもので、一部の小項目を除けばいずれの学科にも共通性が高く、かつ授業改善に資する上で基本的な項目である、と本委員会では判断している。

その概要を以下に記すが、より詳細な評価分析が必要であれば各学科で行っていただきたい。

##### A. 学部・学科について

##### A - 1. 進学時に本学部・学科を選んだ理由は何ですか (複数回答可)

「興味ある分野だから」を生物資源生産学科 (以下生産学科) は 76%、生物生産システム学科 (以下システム学科) は 50%、生物資源利用学科 (以下利用学科) は 68% を挙げたが獣医学科は 44% に過ぎない。システム学科は 38% が「センター試験の成績から」を選んでいる。次いで、「就きたい仕事があるから」は獣医学科 (78%) を除く 3 学科はそれぞれ 1 ~ 4 名が選んだのみであった。獣医学科の学

生は進学時に就業に対する目的が明確であることを示している。

A - 2 . 学科のイメージは入学前と一致していた

システム学科の学生は「強く思う」は全くなく、わずか9名(17%)が「思う」を挙げたに過ぎず、生産学科、利用学科、獣医学科でも「強く思う」と「思う」を合わせてそれぞれ43%、46%および33%であり、入学後の学科のイメージは入学前と比べかなりかけ離れていると感じていることが窺われる。アドミッションポリシー始め、学部の広報を見直し、あるいは入学生の期待を裏切らない教育体制を確立する必要がある。

A - 4 . 大学で身につけたと思うのはどれですか(複数回答可)

各学科ともよく似た傾向を示し、上位を占めたのは学部全体で実験・研究能力55%、気力・忍耐力32%、課題設定・問題解決能力32%、論理的思考力31%、対人関係能力30%、プレゼン能力30%、判断・洞察力29%などである。しかしながら、英語運用力は5名(2.6%)、国際感覚は13名(6.8%)が選択したに過ぎず、このことは「E - 5 在学中に取得した資格は」の問いに対し、英検2級を1名、TOEIC 500点以上を13名の申告をよく反映する。これらの傾向は16年度とよく一致する。教養英語、科学英語等の大いなる改善、学外資格の取得指導を勧めるなどの努力が必要と思われる。

A - 3 . 本学・学科で学んだことを誇りに思う

学部全体で「強く思う」(21%)と「思う」(47%)を合わせ68%が、生産学科70%、システム学科60%、獣医学科59%特に利用学科の学生は78%が肯定的に回答している。この質問に関連して、「A - 5 . 高校の後輩に本学部への進学を推奨したい」の問いに対し、生産学科はこの数字(A-3)をよく反映し「強く思う」と「思う」を合わせて51%の学生が肯定的に回答しているが、利用学科と獣医学科は「強く思う」と「思う」を合わせてそれぞれ39%、37%に過ぎずA-3とのギャップがあまりに大きくその理由を今後解析する必要がある。

B . 教養教育について

B - 1 . 教養教育は充実していた

「強く思う」と「思う」を合わせ生産学科は48人中25人、52%が肯定的に回答したが、システム学科は49人中19人、39%、利用学科は54人中22人、41%、獣医学科は24人中3人、12%が肯定的な回答をしたに過ぎず、獣医学科に至っては13人、54%が否定的(「思わない」と「全く思わない」)な回答をしている。全体の42%が「どちらとも言えない」としている。

B - 3 . 教養教育は人間形成に役立った

学部全体で175人中41人、23%が肯定的(「強く思う」と「思う」)に回答したに過ぎず、54人(31%)が否定的な回答(「思わない」と「全く思わない」)をし、

否定的回答がわずかに多い。特に獣医学科は50%が否定的に回答している。なお、78人、45%は「どちらとも言えない」としている。B-1の結果とともに、教養教育の更なる充実・改善について今日教育推進センターと協同していく必要がある。

## C．専門教育について

### C - 1．自分の学科の教育理念・目標を知っていますか

各学科ほぼ同じ傾向を示し、学部全体の学生の僅か44人、23%が肯定的「はい」に回答したに過ぎず、141人、74%と実に4人に3人までもが否定的「いいえ」に回答している。また、「C - 3．各授業の習得目標が明示されていた」かの問に対し肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したのは全体で31%とC - 1．の質問と全くよく一致している。シラバスやガイダンス等あらゆる機会を捉え、教育理念・習得目標を伝えていく必要がある。

### C - 2．専門科目は総じてよく勉強した

全体で111人、58%が肯定的（「強く思う」と「思う」）と回答し、否定的回答（「思わない」と「全く思わない」）はわずか17人、9%であった。特に生産学科は33人、71%が肯定的に回答し、否定的回答は全くなかった。専門科目に対する学生の自己評価は比較的高いが、「B - 5．教養教育は総じてよく勉強したか」の問いに全体の25%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に答えたに過ぎず、特に獣医学科は13人、56%が否定的に回答し、教養科目の評価が低いのに比べ、専門科目の評価は高い。

### C - 5．各講義や実習の内容は理解できた

講義は学部全体で65%、実習は74%が肯定的回答をしており、特に実習に高い評価を与えている。特に、利用学科は全く否定的回答はなかった。そして、「C - 6．学科で勉強してきて、興味のもてる専門分野を見つけることができた」との問に対して、学部全体で70%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答している。

さらに詳細に検討すると「C - 8．専門科目は自分の勉強したいことを網羅していた」との問いに対し生産学科は29%、獣医学科は特に少なく25%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答しているが、システム学科は38%および利用学科は比較的多く49%が肯定的に回答した。また、「C - 4．専門科目を体系的に履修することができた」及び「C - 7．学生実験・実習の時間および内容は適当であったか」の問いに対し肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したのは学部全体でそれぞれ47%、50%であった。受験時に教育カリキュラムを伝えるとともに、学生が学びたいと考える学問分野の科目を構築していく必要がある。

一方で、「C - 10．教育に必要な施設・設備は充実していた」に対して、獣医学科はわずか1人、3.6%が肯定的に（「強く思う」と「思う」）、61%が「どちらとも言えない」とし、32%は否定的に（「思わない」と「全く思わない」）回答す

るなど、施設・設備に対する強い不満を表している。獣医学科を除く3学科は34ないし49%が肯定的に回答している。

さらに、「C - 9 . 各授業はよく準備されていた」の間に生産学科は41%、システム学科は29%、利用学科は37%対し獣医学科は僅か14%が肯定的(「強く思う」と「思う」)に回答したに過ぎず、48%は「どちらとも言えない」と回答している。

「C - 11 各科目には適当な教員が配置されていた」の間に生産学科は51%、システム学科は48%利用学科は54%対して獣医学科は僅か14%が肯定的(「強く思う」と「思う」)と回答している。特記すべきは、このC - 9(授業の準備)、C - 10(設備の充実)およびC - 11(適当な教員)の3つの質問に対する回答は極めてよく一致し、いずれの間に対しても獣医学科の評価が他の学科に比べ低いことである。応用生物科学部獣医学課程においても、旧獣医学科のカリキュラムを踏襲し教育を行なっているため、これらの調査を踏まえた改善活動を行なう必要がある。

実習内容については評価が高いことから内容を含む実習について応用生物科学部でも継続していくとともに、教育に必要な設備・施設のさらなる充実、教員の適切な配置、よく準備された授業が強く求められている。

## D . 卒業研究について

### D - 1 希望する研究室へ入室できた

学部全体で「強く思う」と「思う」と肯定的に回答したのは87%であった。全体の70%は「強く思う」と回答し、第1志望の研究室へ入室できたと思われる。特に生産学科と獣医学科はそれぞれ75%、78%ときわめて高い値を示し、4人中3人が希望した研究室へ入れたことを示している。システム学科は62%とやや低く若干の不満の残る結果を示している。「思わない」と「全く思わない」すなわち希望の研究室へ入室できなかった者が各学科に1ないし3名いたことは反省すべきである。

この数字を反映して、「D - 4 . 卒研テーマに満足してしている」との問いに対し、生産学科は71%、システム学科は67%、利用学科は64%とそれぞれ肯定的(「強く思う」と「思う」)に回答しているが、獣医学科は50%が肯定的に答えているに止まっている。獣医学科は14%が否定的(「思わない」と「全く思わない」)に他の3学科は10%が否定的に回答している。これらの数字は、「D - 6 . 卒研指導は適切であった」との間に極めてよく反映されている。すなわち、生産学科は68%、システム学科は70%、利用学科は68%、獣医学科は57%が肯定的に回答している。特に各学科において卒研のテーマに満足していると答えた数と卒研指導は適切であると答えた数はほとんど一致している。

卒論のテーマ、指導に対する評価は獣医学科が他の3学科に比べ10ポイント以上低く、16年度も同様のことが指摘されており改善の余地がある。

D - 2 研究室への分属は何を基準に決めましたか（複数回答）

学部全体で 75%が「研究への興味」、これに加えて 31%が「教員の人柄」、26%が「研究室の雰囲気」を挙げている。

「7. その他」の記述欄に「人気の研究室を避けた」あるいは「あきらめた」、「抽選にもれ（2人）」、「やむを得ず」の記載があり希望の研究室に入れなかった者が少数ではあるが存在する(D-1を参照)。

D - 3 . 卒研期間は適切であった

肯定的(「強く思う」と「思う」)回答は生産学科(57%)とシステム学科(65%)に比べ、利用学科(49%)と獣医学科(35%)は少ない傾向を示している。昨年度も同様な傾向が見られる。現在、設定されている卒業研究の期間が、教育上適切な長さであることを学生に伝え、理解されるよう努力する必要がある。

D - 7 . 卒研は自分にとってどんな意義がありましたか（複数回答可）

その上位に挙げられたのは、「論文作成・作文表現力の向上」(58%)、「プレゼンテーション能力の向上」(55%)、「実験・研究能力の向上」(53%)などの実務的能力であった。一方、「コミュニケーション能力の向上」(17%)や「英語能力・読解力の向上」(20%)を挙げる者は少なかった。また、「特に意義を見出せない」とした者がその数は少なかったが8名(4%)いた。昨年度とほとんど同じ傾向が見られた。

D - 5 . 卒研は卒後進路に影響した

学部全体の 28%が肯定的(「強く思う」と「思う」)に、35%が否定的(「思わない」と「強く思わない」)に、26%が「どちらとも言えない」と回答しその評価は割れた。気になるには「回答保留」が獣医学科を除く 3 学科で6ないし8名合計 21名(11%)いたことである。他の多くの項目で「回答保留」と答えた者は数名が全く無いのに比べ多い。卒研が卒後の進路に与えた影響に判断をつけかねているのであろうか？ 同様の傾向は昨年度にも見られた。

E . 学生生活の支援・指導について

E - 1 . 教員による学習・生活などの指導は適切であった

学部全体で肯定的(「強く思う」と「思う」)な回答は研究室の教員(69%)、授業担当教員 44%)が比較的多く、クラス担任(39%)と教務担当教員(38%)はやや低かった。学科別では利用学科が他の 3 学科に比べ、いずれも 54%以上の肯定的回答が目立った。利用学科ではクラス担任、教務担当教員がこの点に関してよく機能していたと言える。

E - 2 . 事務部の学生に対する対応は適切であった

肯定的(「強く思う」と「思う」)な回答は学部学務係(33%)が本部学務部(39%)よりもやや少ないが、いずれにしてもその評価はあまり高いものではない。全体

でほぼ4人に1人が本部も学部もその対応は適切でないと否定的に評価している。

#### E - 3 . 就職および進学に指導や支援は適切であった

肯定的(「強く思う」と「思う」)な回答は全体で僅か24%に過ぎず、最も多かったのは「どちらとも言えない」の44%であり、否定的(「思わない」と「全く思わない」)な回答も23%あった。ここでも学生に4人に1人は不満を示している。全く同じ傾向が昨年度も見られた。これら支援について農学部学生に対して根本的な見直しを行い、新学部応用生物科学部でも、19年には卒業予定学生となるため、早急な支援体制づくりが必要である。

#### F . 卒業後の進路先(就職先)について

##### F - 1 . 卒業後の進路先を選んでください

会社に就職したのは生産学科の39%、システムの48%、利用の32%と獣医の1人、3%であった。獣医学科は昨年度に比べ約10ポイント増の71%が動物病院に就職した。進学したのは生産学科の39%、システム学科の35%、利用学科の59%および獣医学科の14%であった。獣医学科を除く3学科はいずれも10ポイント以上進学者が増加している。

##### F - 2 . 希望する進路先に進めた

学部全体で強く思う(43%)と思う(29%)を合わせ、肯定的な回答をした者は73%と高率を示した。特に獣医学科は75%が「強く思う」としている。しかし、システム学科では「思わない」と「全く思わない」を挙げる者が合わせて8名(15%)いた。昨年もほぼ同様の傾向が見られた。

##### F - 3 . 進路先は学んだ専門分野と関連性が高い

学部全体の63%が肯定的(「強く思う」と「思う」)に回答している。一方で、14%の者が否定的(「思わない」と「全く思わない」)に、すなわち、進路先は専門分野と関連性が低いと評している。学んだ専門性をより活かせる就職口を積極的に開拓していく必要がある。また、専門性の高い就職口は、大学院修了が前提なりつつあることを学生に伝え、進学によりさらに専門的に学ぶことを勧める必要がある。

##### F - 4 . 就職にはどのような能力の養成・強化が必要とされますか(複数回答可)

全体で上位を占めたのは、討議などコミュニケーション能力(50%)、口頭発表能力(48%)、問題設定・解決能力(39%)、専門知識(36%)などであった。社会的責任自覚能力・倫理教育(27%)、日本語による論理的な記述力(25%)、インターンシップ(23%)、情報処理能力(21%)などがこれに続き、国際的に通用する英語運用能力は14%の者が挙げたに過ぎなかった。昨年度とほぼ同様の傾向である。

## 平成17年度農学研究科修了時アンケート

### <分析結果>

#### 1. 回収率について

全体で約81%（88名中71名）の回収率であり、専攻別には生物資源生産学専攻（以下生産学専攻）29名中20名69%、生物生産システム学専攻（以下システム学専攻）25名中21名84%、生物資源利用学専攻（以下利用学専攻）34名中30名88%で昨年度とほぼ同じ値であった。

#### 2. 評価項目について

評価の対象とした5項目（21小項目）は昨年度と全く同じで、一部の小項目を除けばどの専攻も共通性が高いと判断された。

#### A. 研究科・専攻・研究室について

##### A-1. 本研究科を選んだ理由

「自分が学びたい専門分野の先生がいるから」を全体の65%が選んだ。これに関連して、「A-2. 研究室の選択基準」を複数回答可で求めたところ各専攻とも「研究への興味」を一番に挙げ、全体で58%であった。「卒論を行った研究室だから」が48%とこれに次いだ。「教員の人柄」は生産学専攻の25%、システム学専攻の24%に対し、利用学専攻は10%であった。昨年度とほぼ同様の傾向が見られ、研究への興味、指導教官を含め「研究の継続性」で研究室を選んでいることが判る。特記すべきはシステム学専攻は「研究室の雰囲気」と「研究室のメンバー」をそれぞれ24%が挙げている。雰囲気の良い研究室運営が進学選択の理由の一つとなっていることが窺われる

##### A-6. 修論作成のための研究は自分にとってどんな意義がありましたか（複数回答可）

全体で上位を占めたのは「問題設定・解決能力の向上」（70%）であり、「実験・研究能力の向上」（65%）、「論文作成・作文表現の向上」（59%）と「プレゼンテーション能力の向上」（55%）がこれに続いた。「英語論文読解力の向上」（25%）や「コミュニケーション能力の向上」（24%）を挙げた者は少なかった。これらの傾向は学部生の卒研に対する態度とよく一致している。

また、これに関連して「A-9. 大学院生活を通じ身につけたと思うものはどれですか」を複数回答可で問うたところ、A-6. 修論の意義に対する質問と同様に「実験・研究能力」や「プレゼン能力」をそれぞれ56%、48%が挙げた。修士論文作成により教育指導が、全般的に適切に行なわれていると考えられる。

### A - 3 . 修論テーマに満足している

肯定的(「強く思う」と「思う」)回答は全体で 83%であり、特にシステム学専攻は昨年同様 90%と極めて高い数字を示し、生産学専攻(85%)と利用学専攻(77%)は僅かに低く、否定的(「思わない」と「強く思わない」)な回答は利用学専攻で 10%見られた。

そして、「A - 5 . 修論の研究指導は適切であったか」の問いに対し肯定的な回答(「強く思う」と「思う」)は全体で 73%であり、専攻別に見るとシステム学専攻(90%)が高く利用学専攻(53%)とやや低い。否定的回答(「思わない」と「強く思わない」)は生産学専攻とシステム学専攻で各 1人であったが、利用学専攻ではやや多く 6人(20%)に見られた。

### A - 7 . その研究室で学んだことを誇りに思う

肯定的回答(「強く思う」と「思う」)はシステム学専攻で 100%であったが、生産学専攻で 70%、利用学専攻は 67%とやや低く否定的回答(「思わない」と「全く思わない」)が 5人、17%に見られた。

### A - 8 . 研究室のイメージは大学院入学前と一致していた

肯定的な回答(「強く思う」と「思う」)はシステム学専攻 86%、生産学専攻で 85%であったが、利用学専攻で 67%とやや低く、否定的回答(「思わない」と「強く思わない」)は全体で 6人、8%であり、昨年度に比べ各専攻科で肯定的回答が 12ポイント以上増えている。

## B . 大学院生活の支援・指導について

### B - 1 . 教員による学習・生活などの指導は適切であった

研究室教員：肯定的な回答(「強く思う」と「思う」)はシステム学専攻(90%)と生産学専攻(80%)で多かったが、利用学専攻では 57%に過ぎなかった。同様の傾向は昨年度にもみられた。

授業担当教員：肯定的回答はシステム学専攻(71%)、生産学専攻(60%)、利用学専攻(50%)と 3専攻共に研究室教員による指導に比較し少なかった。

### B - 2 . 事務部の学生に対する対応は適切であった

全体で肯定的回答(「強く思う」と「思う」)は学部学務係で 51%であったが、本部学生部では 43%とやや少なかった。いずれにおいても 2人に 1人が不満を抱く対応の原因を突き止め、抜本的な改善が必要である。

### B - 3 . 就職および進学の指導や支援は適切であった。

全体で肯定的回答(「強く思う」と「思う」)は僅か 27%に過ぎず、38%は「どちらとも言えない」とし、否定的回答(「思わない」と「全く思わない」)が 24%も見られた。すなわち、就職などの指導は適切であったと感じている者は全体で 4人に 1人である。これらの支援について、農学部学生



と共に、根本的な見直しを行い、早急な支援体制づくりを行なう必要がある。

#### B - 4 . 大学院在学中に取得した資格がありますか

全体(71名)でTOEIC(2名、525、590点)であり、また、英会話学校に通った者(A - 5)は1名に過ぎない。これらの数字は修論作成の過程などで身に付けたものとして英語運用能力(A - 9)を9名(13%)が、英文論文読解力の向上(A - 6)を18名(26%)が選んだことをよく反映している。これら英語に関する質問に対する修了生の回答は、学部卒業生の回答に極めてよく一致している。

#### C . 修了後の進路先(就職先)について

##### C - 1 . 進路先を選んでください

全体の66%が会社に、6%が官公庁に就職し、11%が進学(専門学校を含む)した。昨年3月25日現在で未定が11%いたが今年度は未定は全くいない。

##### C - 2 . 希望する進路先に進めた

肯定的回答(「強く思う」と「思う」)は全体で79%であり、「思わない」と回答したのは全体で2名(3%)だけであった。これに関連して、「C - 3 . 進路先は学んだ専門分野と関連性が高いか」の問いに対し、肯定的回答(「強く思う」と「思う」)は41%に過ぎず、24%が否定的(「思わない」と「全く思わない」)に回答した。否定的回答は利用学専攻でやや多く、33%に見られた。

##### C - 4 . 就職にはどのような能力の養成・強化が必要とご思いますか(複数回答可)

全体で上位を占めたのは、全体で「問題設定・解決能力」(41%)、「口頭発表能力」(51%)および討議などの「コミュニケーション能力」(54%)であった。

#### D . 総合評価

##### D - 1 . 大学院に進学して満足しましたか

肯定的回答(「強く思う」と「思う」)は生産学専攻とシステム学専攻でそれぞれ90%見られたが、利用学専攻では73%とやや少なかった。否定的回答(「思わない」と「全く思わない」)は利用学専攻で2人見られたが、生産とシステムには全く見られなかった。全般的にこれに類する質問項目で、利用学専攻の満足度が低い傾向にある。利用学専攻では、専攻や、分野において、この原因についてさらに検討すべきである。